

平城宮跡・平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

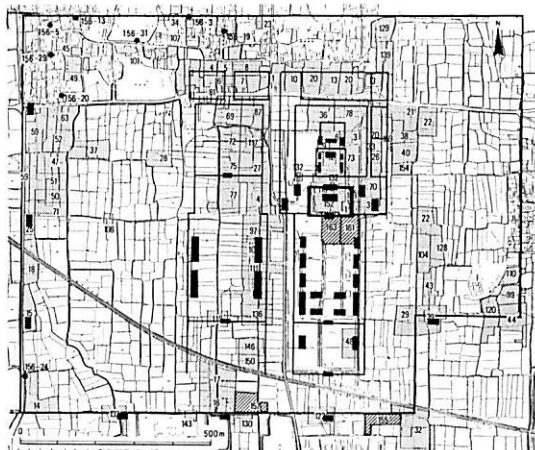
1984年度、平城宮跡発掘調査部では、平城宮跡内で第二次朝堂院東第一堂地域や南面大垣など17件（宮北方遺跡を含む）、京域内で、左京四条二坊一坪、十五坪や薬師寺の調査など25件、計42件の調査を実施した（35頁参照）。以下その主な調査の概要を報告する。

1 平城宮跡の調査

南面大垣東端地区（第155次）の調査 南面大垣東端部の復原整備に先立ち、南面大垣とその北側の溝・二条大路北側溝を一体に把握することを目的とした調査で、調査地は第32次及び第32次補足調査区と一部重複する。調査の結果、(1)南面大垣についての従来の調査結果を再確認するとともに、(2)大垣東端部分の築成時期が神亀末年に降ることが明らかとなり、また、(3)大垣の改修・補修を検討する上での新知見を得た。

検出した主な遺構は南面大垣とその北側の溝、二条大路とその南北両側溝、南北溝5条、左京三条一坊の北面築地等である。

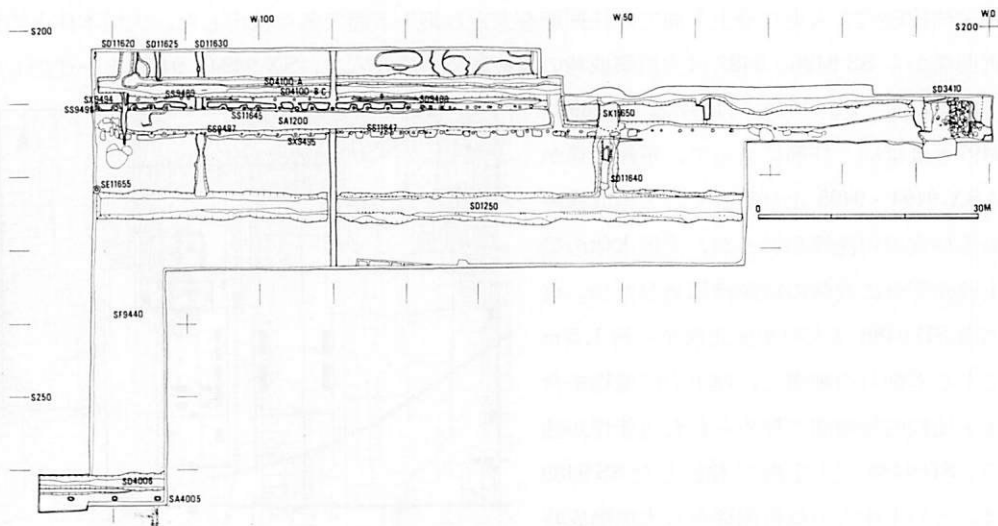
南面大垣 SA 1200 SA 1200は、大垣本体築土部、犬走り築土部、犬走り部にある掘込み地業、5列の柱穴列、1条の溝からなる。大垣本体の築土は調査区西端から東へ89mまで残存し、以東は後世の削平で消失している。大垣本体は基底幅2.7mで、砂質土と粘質土とを互層に版築する。犬走りの築土は大垣北側にのみわずかに残存し、南側は後世の削平で消失している。版築は大垣本体の版築よりやや粗い。犬走り部には掘込み地業SX 9494・9495があり、柱穴列SS 9496・9497を避けるように地業を行っている。大垣本体の南北に沿って東西方向の柱穴列4条があり、二種に分類できる。犬走り築土が残存する大垣北側にあるSS 9496では、柱痕跡・柱抜取穴を犬走り築土上面で、柱掘形を犬走り築土下面で各々検出した。大垣本体との位置関係からSS 9496・9497は大垣築成時の堰板留めの添柱穴で、SX 9494・9495と一連のものと思われる。SS 11645・11647はSS 9496・9497とほぼ同じ柱筋にあって、重複関係からSX 9494・9495より新しく、大垣改修時の添柱穴の可能性があるが、大垣本体の築土残存部分に改修の痕跡は認めがたい。東西溝SD 9488は大垣本体北端から約1.5mにある素掘りの細溝で、埋土中に遺物を含まず比較的短期間で埋められた可能性が高い。SD 9488埋土下面で検出したSS 9489は、大垣本体との位置関係から大垣築成時の足場穴であろう。



平城宮跡発掘調査位置図

SD 4100 と 5 条の南北溝 SD 4100 は南面大垣の北側にある東西溝で、溝底位置の差と出土遺物の差から 3 時期に区分できる。A 期の溝は大垣本体北端より北へ 4 m にあり、平城宮土器編年Ⅱ期の土器と郷里制下の木簡が出土した。B 期には南へ 1 m 移動し、奈良時代中頃以降の蹄脚硯が出土した。C 期は B 期より 0.3 m 北へ移り、東へ行くにつれ南に振れ幅もひろがり、奈良時代後半の土器が出土した。溝心が異なるのは各時期での性格の差に基くとみられ、A 期は宮内道路 SF 1761 南側溝、B・C 期は大垣の雨落溝または大垣からの雨水排水溝であった可能性が強い。SD 4100 には 2 条の南北溝が注ぐ。SD 11620 は 4 時期あり、A～C 期の溝は SD 4100 の A～C 期に対応する。SD 11625 は SD 4100 の B・C 期に対応する。SD 11630 は宮内から二条大路北側溝に注ぐ大垣本体築成以前の溝で、工用水の水抜き等に利用され、短期間で埋められたと思われる。SD 11640 も SD 1250 に合流する溝で、大垣との交叉部では溝埋土上に大垣築土が残り、霊亀 3 年～神亀 5 年の木簡が出土した。このことから、SD 11640 は早い時期に埋め立てられたのち大垣が築かれた可能性があり、更に SD 11640 以東の SD 4100 からは殆んど奈良時代前半の遺物が出土しないことも考慮すると、SD 4100 は当初東へ伸びず SD 11640 となって南流していたのが、SD 11640 が埋め立てられたことで東へ延長東流させられた可能性もでてくる。SD 3410 は宮東端の基幹排水溝で、大垣本体築土が削平されていて大垣部分が暗渠か開渠かは不明である。堆積土は 2 層に大別できるが、9 世紀前半に攪乱があったため出土遺物に時期差はない。

二条大路 SF 9440 南面大垣心から 12 m 南に二条大路北側溝 SD 1250、49.5 m 南に南側溝 SD 4006 があり、また南側溝のすぐ南には左京三条一坊の北面築地 SA 4005 がある。SD 1250・4006 はともに素掘りの東西溝。SD 1250 東半部では護岸の杭が打ち込まれ、一部にはシガラミもある。SA 4005 は築土が削平されているが、基底部上で築地寄柱穴 3 個を検出した。



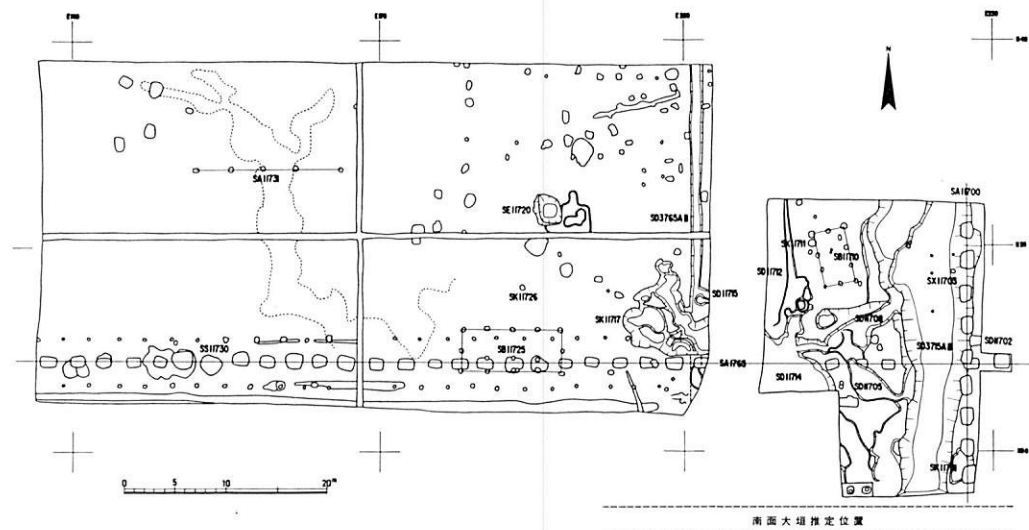
南面大垣東端地区発掘調査遺構図

第一次朝堂院地区東南隅(第157次)の調査 第一次朝堂院地区の調査は、第一次東朝集殿推定地を含め継続して行ってきた。今回は該地区の最南端を調査した。調査の目的は、(1)第150次調査で検出した第一次朝堂院地区東限の築地と南面大垣との関係を解明し、(2)宮基幹排水路の一つである SD 3715 の宮最南部での知見を得ることにあった。調査の結果、(1)第一次朝堂院地区南半に建物は存在せず広場であったことを再確認し、また(2)南面大垣に先行する当初の宮区画施設の可能性もある東西堀と第一次・第二次朝堂院の間に位置する南北堀の存在を確認したが、(3)東限の築地想定延長位置は現水路直下で、存否の確認はできなかった。

検出した奈良時代の主な遺構は、掘立柱堀 2 条、溝 2 条、井戸 1 基等である。

2 条の掘立柱堀 SA 1765 は第16・17次調査で既に 4 間分を検出済みの東西堀で、今回新たに 35 間分を検出し、更に調査区外東方へ延びることを確認した。南面大垣心より北約 16 m にあり、大垣に平行する。各柱間中央の南北には柱筋から各々 2.4 m を隔てて足場穴 SS 11730 がある。SA 1765 は本調査区内の奈良時代の遺構の中では最も古い。南北堀 SA 11700 は SD 3715 東岸にあり、9 間分を検出した。SA 1765 より新しく SD 3715 より古い。

2 条の南北溝 SD 3765 は第一次朝堂院地区当初の基幹排水路で、2 時期ある。南半は削平をうけているが、下層は SA 1765 以南に延び、上層は途中で東流させられていたらしい。SA 1765 廃絶後の開削である。SD 3715 は SD 3765 より新しく掘られた該地区の基幹排水路で、南端は南面大垣想定心から北約 2 m の位置まで検出した。埋土は 3 層に大別できるが、宮廃絶後の流路である上層を除き、出土遺物には中・下層に大きな時期差はない。下層がほぼ一定の幅を保つのに比べ、中層は西側に大きく幅をひろげる。中層の時期に架けられていたと思われる橋脚 SX 11703 の残欠が東岸寄りにある。中・下層からは削屑を含む木簡・下駄・曲物等と大量の土器が出土した。特に須恵器では陶邑窯以外の製品が多数を占める。



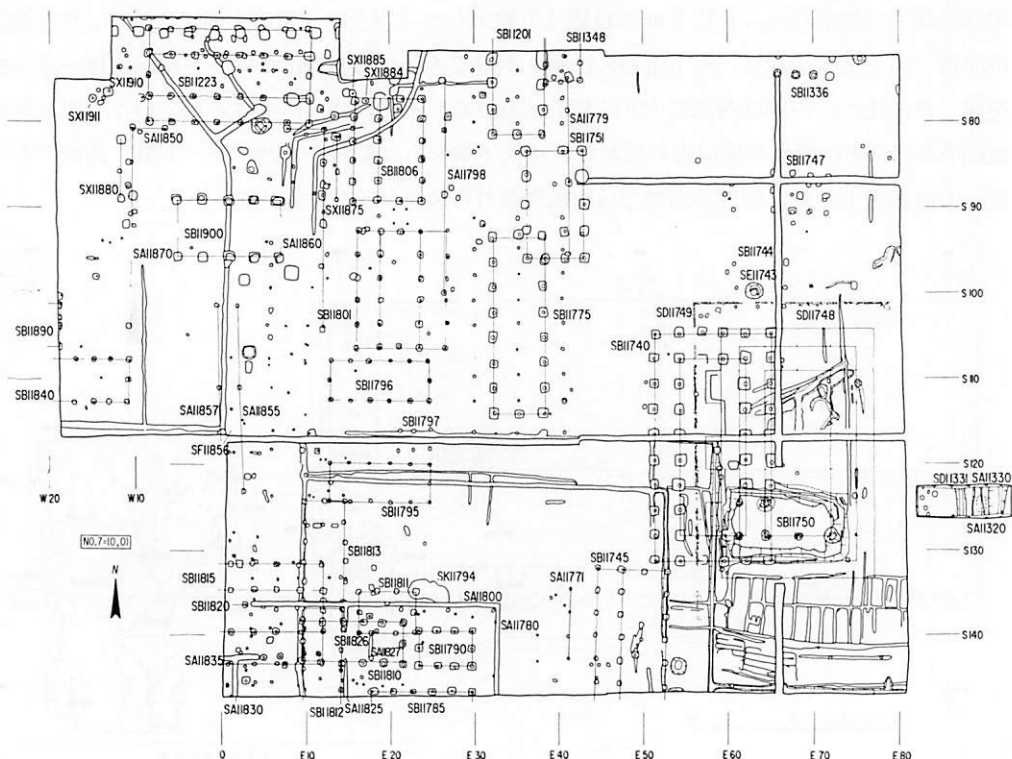
第一次朝堂院地区東南隅発掘調査遺構図

第二次朝堂院地区（第161・163次）の調査 第二次朝堂院地区については、第152・153次調査で大極殿閤門前方及び朝堂院北面築地南方の朝庭東北端部が調査区内に含まれたことがあるが、該地区の本格的調査は今回が最初である。主な課題は、従前の第二次大極殿地区での調査成果をうけて、(1)東第一堂の規模、(2)大極殿院地区下層掘立柱建物群対応遺構の存否、(3)朝庭上での遺構の有無、等の解明にあった。調査の結果、(1)東第一堂の規模が判明し、(2)東第一堂下層に掘立柱建物の存在を確認、また(3)朝庭にも多数の掘立柱建物が検出された。特に奈良時代の大嘗宮・廻立殿の遺構を突き止めたことに大きな意義がある。

検出した奈良時代の遺構はA～D期の4時期に区分でき、A・B期は下層の掘立柱建物群の時期、C・D期は上層の礎石建物と仮設の掘立柱建物とが併存する時期に各々相当する。

A期 既に一部を検出済みであったSB 11201とその南で側柱筋を揃えたSB 11775はともに7間2間の南北棟で、軒・棟通りに足場穴を伴い、恒常的な建物とみられる。SB 11813とSB 11812とは側柱筋を揃える南北棟であるが、互いの妻柱列が相接するので同時存在とは考えがたく、A期は更に細分できる可能性がある。

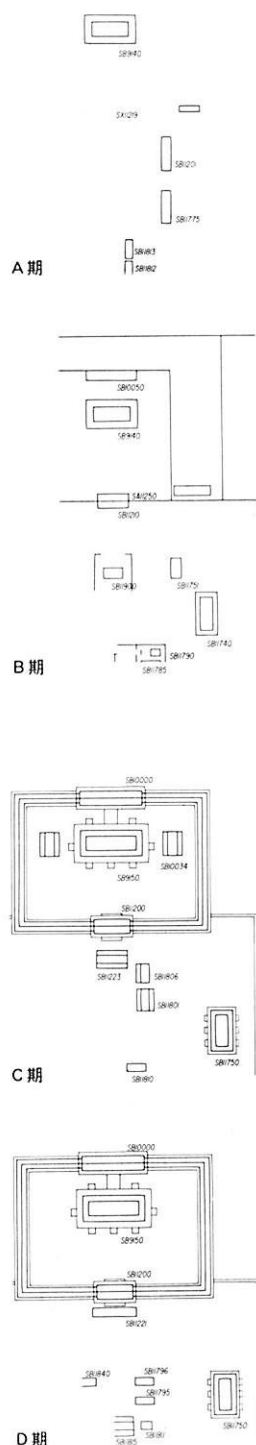
B期 SB 11740は身舎7間3間の四周に廂の付く南北棟で、大極殿院下層の建物群と一連の建物である。柱間寸法は身舎梁行のみ9尺で、他は全て10尺である。第153次調査で既検出の下層建物群の東辺を限る掘立柱塼SA 11320の南延長部にあたる個所で柱掘形1個を検出した。



第二次朝堂院地区発掘調査遺構図

SB 11900 は 4 間 1 間の東西棟で、大極殿間門下層の掘立柱の門 SB 11210 から南約 45 m に棟通り筋がくる。SB 11900 の東北西の三方を取り囲んで塀状遺構 SA 11860・11850・11870 があり、南には朝堂院東西二等分線に対し左右対称の南北柱列 SA 11855・11857 がある。SB 11900 東方にある SB 11751 は 4 間 3 間の南北棟で、北妻中央西側に柱はなく、東南隅入側に一本の柱が立つという異例の柱配置をとる。SA 11780・11800・11825・11827・11830・11835 の 6 条の溝状遺構は柴垣据付溝で、SA 11780・11825・11830・11835 は調査区外へ延びる。SA 11800 は、朝堂院東西二等分線から東約 2.7 m で閉じ、西に接して検出した柱穴 1 個は柱間 1 間の門 SB11820 の東柱。SA 11830 は朝堂院東西二等分線に沿い、SA 11825 は北端から 3 m 南で 3 m にわたり途切れたのち南へ延びる。溝の途切れた部分が門 SB 11826 で、真東に SA 11827 がある。SA 11780・11800・11825 で囲まれた空間の中には SB 11785・11790 がある。SB 11790 は 3 間 2 間の東西棟で、この南 3 m に東妻柱列を揃える SB 11785 があり、桁行 5 間を検出した。

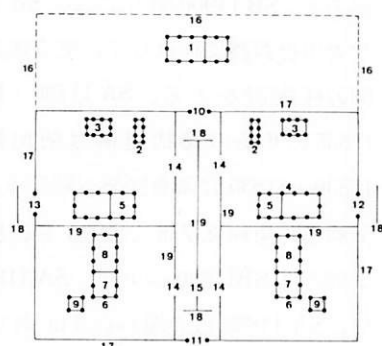
C 期 東第一堂 SB 11750 は基壇北半が完全に削平され、南半の基壇土の残存かとみられていた土壇状の高まりも旧耕土・整備土で厚く覆われ、礎石抜取穴 6 個を検出するにとどまった。しかし、その規模は、身舎 5 間 2 間の四周に廂が付く南北棟で、身舎桁行・梁行柱間寸法は 13 尺、廂の出 10 尺、基壇の出 7 尺で西面 3 カ所に階段があり、その出は 1.8 m と推定される。基壇外装及び上面の敷石には凝灰岩切石が用いられ、基壇の周囲には小礫敷の舗装がされていたと思われる。SB 11750 は D 期にも引き続いて存在している。SD 11748・11749 は SB 11750 の基壇北・西の外側小礫敷の見切りとなる溝で、基壇外周の水抜き溝とみられる。なお基壇の東・南方は削平をうけていて SD 11748・11749 に相当する溝は検出されなかった。朝堂院東面築地 SA 11330 は削平をうけ築土がわずかに残るだけで基底幅は不明である。SA 11330 の西 2.4 m には素掘りの雨落溝 SD 11331 がある。朝庭には、SB 11223・11806・11801・11890・11810 の 5 棟の仮設の掘立柱建物がある。これらの建物は柱掘形に瓦・凝灰岩を含み、SB 11801 の柱痕跡からは平城宮瓦編年 II 期の軒平瓦 6691A が出土していて C 期の年代の一端を知ることができる。



第二次大極殿院朝堂院変遷図

D期 大極殿閣門南で検出した9間2間東西棟SB 11221と、その真南に70mを隔ててある8間2間の身舎に南北両廂が付く東西棟SB 11815が主たる建物で、両建物の間には3棟の東西棟SB 11796・11795・11840があり、さらにSB 11815東脇にはSB 11811がある。その他、SB 11221の南には朝堂院東西二等分線に対し左右対称に配されるSX 11885・11910、SX 11884・11911、SX 11875・11880がある。

まとめ 今回の調査で特に顕著な成果は朝庭にある3期に及ぶ儀式関連遺構の中のB期の遺構を検出したことである。B期の遺構は極めて規格性に富んだ配置計画をとり、『儀式』等から復原される大嘗宮・廻立殿の配置・規模に基本的に近い。大嘗宮は悠紀院の北端部を検出したことになり、SA 11780・11800は大嘗宮の東・北を限る宮垣、SA 11830は悠紀院・主基院を画する中籬、SA 11825は悠紀院西側中垣、SB 11826は小門、SB 11785は膳屋、SB 11790は白屋に各々当たる。ただ『儀式』等には記載のない屏籬SA 11827を小門東正面に検出している。廻立殿は『儀式』等から5間2間の東西棟に復原されるが、SB 11900は4間1間で、大嘗宮からの距離も『北山抄』とは異なる。しかし、SB 11900は閣門下層の

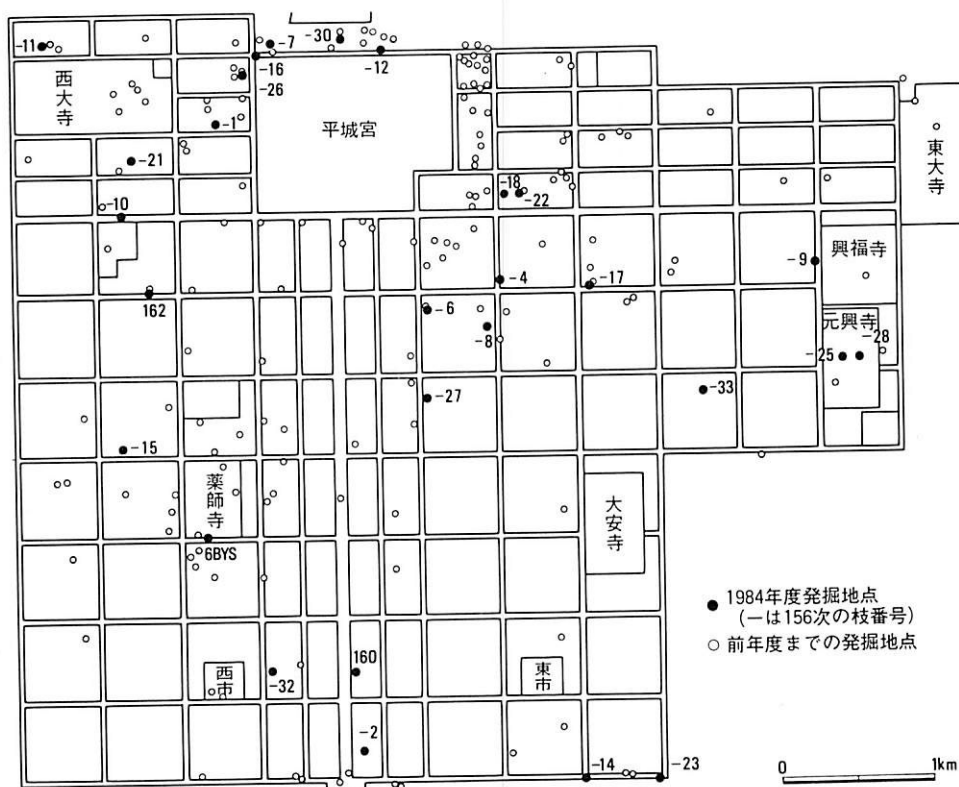


- | | | |
|--------|-------|-------|
| 1 廻立殿 | 8 室 | 15 通道 |
| 2 神服柏棚 | 9 御厨 | 16 斑幔 |
| 3 白屋 | 10 北門 | 17 宮垣 |
| 4 膳屋 | 11 南門 | 18 屏籬 |
| 5 盛所 | 12 東門 | 19 中垣 |
| 6 正殿 | 13 西門 | |
| 7 堂 | 14 小門 | |

大嘗宮・廻立殿建物配置復原図
 (『儀式』巻第三踐祚大嘗祭儀中に基く)
 原図は池浩三『家屋文教の世界』による

門と大嘗宮の宮垣との中央にあること等から廻立殿に相当すると考える。B期の遺構を用いて大嘗祭を行った天皇は、奈良時代に即位した7代天皇のうち『続日本紀』によって大嘗祭の場が判明する孝謙天皇(南薬園新宮)、淳仁天皇・光仁天皇・桓武天皇(太政官院)の4代以外で、大嘗祭の場を明記していない元正天皇・聖武天皇・称徳天皇の3代のうちに求められる。称徳天皇の場合は、第一に菩薩戒をうけた身での重祚であり、第二に大嘗祭当日が恒例の卯でなく酉で、しかも道鏡をはじめ僧侶達が参加するという特殊な事情がある。さらに大嘗祭関連遺構はいずれにしろ聖武天皇以降である上層遺構に先行する下層遺構のB期に属することから称徳天皇の可能性はない。出土遺物の中にはSB 11900の柱抜取穴から出土した軒丸瓦6225Aがある。6225Aは今回の遺構変遷上ではC期に当たる上層遺構の第二次大極殿・築地回廊所用瓦である。大嘗宮が短時日で壊却されることからみてB期の遺構の造営はC期に極めて近いと考えられ、B期の遺構は元正天皇よりも聖武天皇の時とする方が蓋然性が高い。聖武天皇大嘗祭に伴う遺構とすると、『続日本紀』に比較的詳しい記事があり、発掘調査の成果と文献史料との対比ができる好個の事例となり、奈良時代の大嘗祭を研究する上で貴重な発見である。また軒丸瓦6225Aが聖武天皇の即位前後に既に存在していたとなると、この瓦の年代観が『基準資料2』のⅡ期から『平城宮発掘調査報告Ⅺ』でⅢ期に変更されていただけに、第二次大極殿院・朝堂院及び下層掘立柱建物遺構群の年代観・性格を論ずる上で刮目すべき事実である。(橋本義則)

2 平城京跡の発掘調査



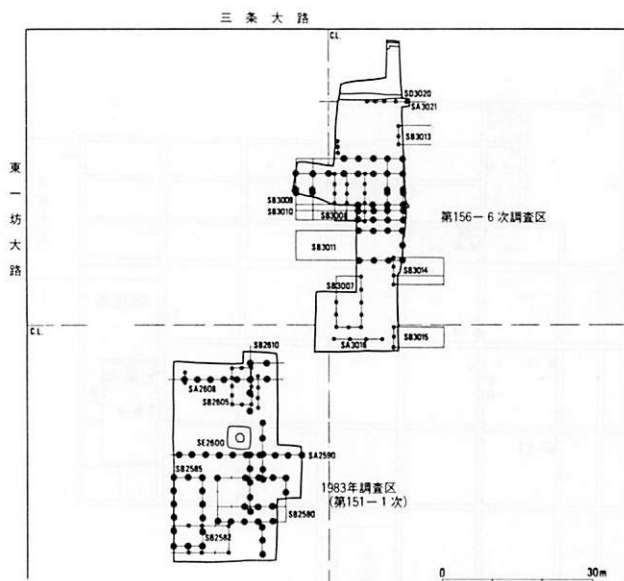
平城京跡発掘調査位置図

左京四条二坊一坪(第156—6次)の調査 ホテル建設に伴う事前調査。一坪は北を三条大路，西を東一坊大路，東と南を坪境小路に面している。調査地は一坪の中央やや北寄り，1983年度の第151—1次調査区の東北にあたる。主な検出遺構は，掘立柱建物8棟，塀4条の他，溝と土壇がいくつかある。重複関係や出土遺物から，遺構は3期に区分できる。

奈良時代前半には南北棟 SB 3007・3008，東西棟 SB 3013・3014・3015 というあまり規模の大きくない建物が建つ。SB 3007・3014・3015 の3棟は，相互に柱筋を揃える。

奈良時代中葉には調査区中央に四面廂付き東西棟 SB 3009 があり，前半代の小規模な建物は姿を消す。SB 3009 は坪の中央やや北寄りに位置し，柱間は桁行・梁間とも10尺等間，柱掘形は身舎部分で一辺 0.7～0.8 m をはかる。

奈良時代後半には SB 3009 と同じ位置に，三面廂付き東西棟 SB 3010 が建つ。梁間を12尺等間にひろげ，南廂を欠く以外は SB 3009 と同規模である。SB 3010 と13尺を隔てた南には，柱筋を揃えた東西棟 SB 3011 が並ぶ。両者の間隔が狭いのは，軒を接して2棟を一体の殿舎とするためである。SB 3010 の柱穴には石や埴を埋め込んで礎板の根石とした特殊な地業があり，特に北側柱筋と入側柱筋に顕著であった。同様の地業が SB 3011 でも確認されたので，この2



左京四条二坊一坪遺構概略図

の南北二等分線をはさむ1/4町の宅地、SB 3008・3013 には1/4町か1/2町の宅地が想定できる。西半の2棟は各々1/4町を占めるのであろう。このように奈良時代前半の一坪はいくつかの宅地に分割して利用されている。奈良時代中葉になると宅地割と建物配置が大きく変化する。主殿 SB 3009 が坪の中央北寄りに建ち、前面を広場とする。坪の東西二等分線が SB 3009 と重複し、南北二等分線は広場を横切るので、この時期には坪全体が一つの宅地になるとみてよい。83年調査区では SA 2590 があり、その南に SB 2580・2585、北に八角形井戸 SE 2600 がつくられる。後半代には宅地割に変化はないが、主殿が2棟を一体としたより大型の建物にかわる。83年調査区の SB 2610 は南北棟建物の可能性が高く、坪の中心建物はコ字形配置をとる。

今回の調査によって、一坪が前半代の細分された宅地割から中葉以後1町の宅地へ変化することが明確となった。さらに、1町の宅地の主殿を確認し宅地の利用形態の一端を明らかにしたことも今調査の成果である。

左京四条二坊十五坪(第156—8次)の調査 賃貸用宿舎建設に伴う事前調査。十五坪は東を東二坊大路、南を四条条間路、北と西を坪境小路に囲まれ、岸俊男氏の研究によって藤原仲麻呂の邸宅「田村第」の地に比定された左京四条二坊東半部の一角に位置する。検出した主要な遺構は掘立柱建物10棟、塀5条、井戸1基といくつかの溝・土塹である。十五坪については1982年に第145次調査を今調査区の西約30mの地点で実施し、礎石建物2棟、掘立柱建物2棟、塀3条などを検出しているので、両地区の成果をあわせて報告する。

検出した遺構は相互の重複・配置関係や出土遺物から、A～Eの5時期に区分できる。A期(奈良時代初頭)には、SA 2240, SB 3037, SD 3042がある。SA 2240は坪東西の計画寸法(450尺)の五等分線とほぼ一致し、SD 3042は南北三等分線に近い。後者は宅地割施設の可能性が高い

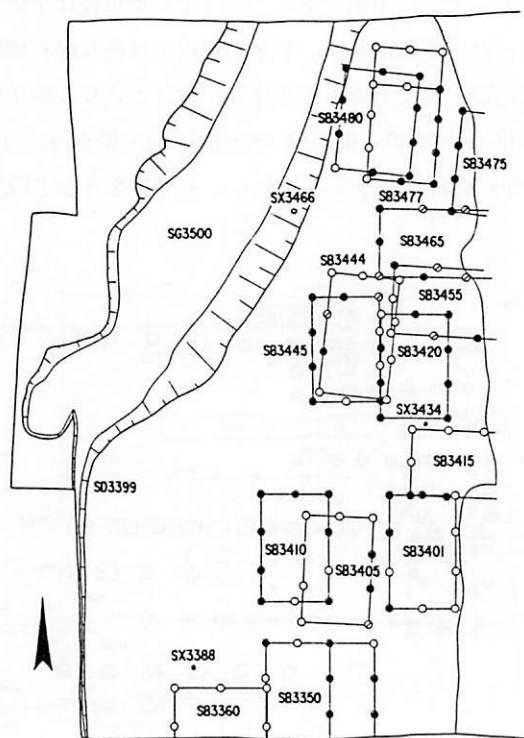
「田村第」であったのかを決するには、今後一層の調査を待たねばならない。

左京八条一坊三・六坪(第160次)の調査 工場建設に伴う事前調査。坪境小路をはさんで東西に並ぶ三坪と六坪は、北を八条条間路、南を坪境小路と接し、三坪の西に朱雀大路が、六坪の東には東一坊坊間路がはしる。調査は主に三坪の東南部と六坪の西南部について実施し、奈良時代の遺構多数を検出したほか、古墳時代と中世の遺構を確認した。

奈良時代の遺構は三・六坪あわせて、掘立柱建物47棟、塀8条、道路2条、池1、井戸1基、土器埋納遺構3基と、溝・土塀がいくつかある。遺構は大きくA～C期に区分できる。

三坪 坪の東辺は中世河川 SD 3340 により遺構が失われていた。調査区西辺にある池 SG 3500が奈良時代を通じて存続し、建物はいずれもその東岸で検出した。A～C期のうちC期は2細分できる。建物は、A期のSB 3350、C1期のSB 3477が廂をもつものの、大半が桁行3間程度の小規模なものである。しかも、各期とも3～4棟が雑然と並び、計画性は高くないことから、この地区は奈良時代を通じて雑舎の空間であったと類推できる。SG 3500は古墳時代の河川が条坊設定後、坪内に池として残ったものである。これ自体が園池であった徴証に乏しく、南端にとりつく南北溝 SD 3399とともに、調査区の南あるいは南西に想定される園池への給水施設であった可能性が高い。また、3基の土器埋納遺構のうち、SX 3388はSB 3360の北妻外側にあり、SX 3434はSB 3420の南妻に接して検出された。両者とも内容物が遺存せず、埋められた位置は建物の出入口にあたる。民俗例等からみて胞衣壺の可能性が強い。他の1基SX 3466は「神功開宝」銭1枚を納めて池の東岸に埋められていた。水に関係する呪術行為を示すものであろう。

六坪 A～C期のうちA期が2細分される。奈良時代前半のA1期には、調査区中央の空閑地を開んで小規模な建物(SB 3180・3195・3212・3230・3250)が建つ。この空閑地にはC期まで建物が建たない。井戸 SE 3260もA1期に掘られる。また、坪西辺を南北溝 SD 3333(坪境小路東側溝)が限る。坪内に本格的に建物が建つのは次のA2期である。付属屋 SB 3225・3320Aを伴う東西棟 SB 3200が調査区の東南部にあり、坪境小路近くに南北棟 SB 3330が建つ。東西溝 SD 3310A



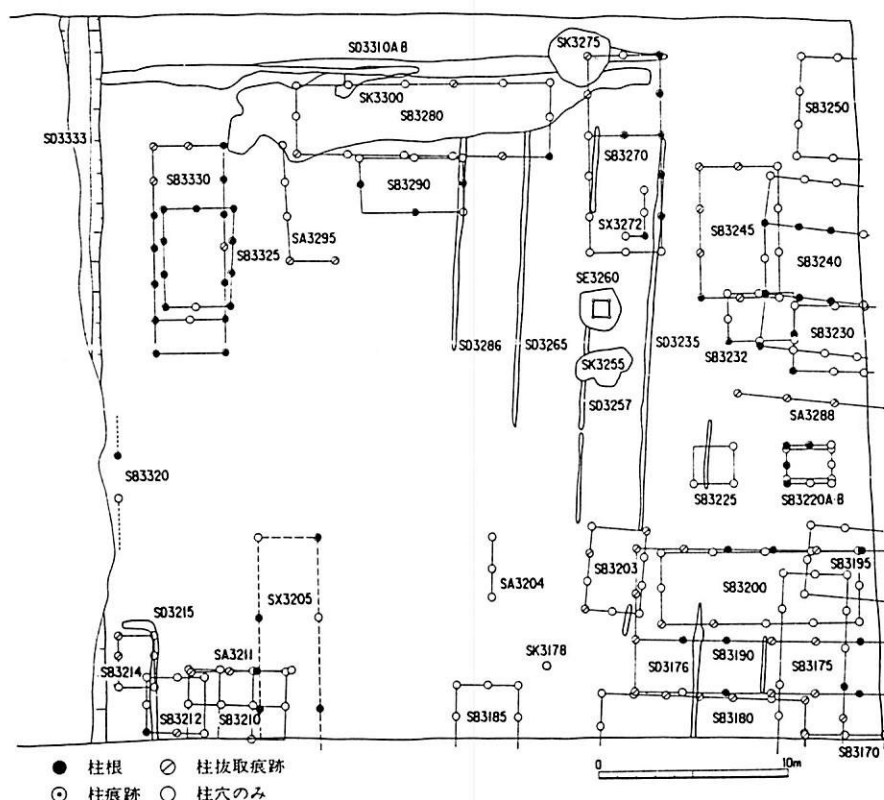
左京八条一坊三坪遺構模式図

は坪の南北二等分線の約 3 m(10尺)南にあり,坪を二分する幅 2 丈の坪内道路の南側溝であろう。

B 期には,南廂付き東西棟 SB 3190 が A 2 期の SB 3200 と同位置で,南北棟 SB 3225 が同じく A 2 期の SB 3330 と同位置で各々建て替えられている。建物配置に A 2 期と共通点がある一方,宅地割には変化がみられる。即ち,調査区北辺にある B 期の建物 SB 3270・3280 は,坪内道路南側溝 SD 3310A と重複するので,この坪区画施設が廃止され宅地は北へ拡大したことが明らかである。門 SB 3320 が坪境小路にひらくのも宅地拡大とその区画施設の整備される B 期とみられる。B 期の年代は奈良時代後半から末頃である。最後の C 期は,どの建物も方向が北で東に振れ,条坊の計画を離れた奈良時代末から平安時代初めの時期であろう。建物はまとまりがなく,塀を伴い独立性が強い。二面廂付き東西棟 SB 3240 以外はいずれも規模が小さい。

遺物は,土壙 SK 3300 から平城Ⅱ～Ⅲの,池 SG 3500 からは,平城Ⅰ～Ⅳの土器が多量に出土した。鳥形硯や計105点の墨書土器を含む。SB 3190 の柱抜き取り穴からは漆紙文書が出土。

平城京以前の遺構として,掘立柱建物を主体とする古墳時代の集落の一角を発見した。遺構はⅠ～Ⅳ期に区分され,出土遺物からみて 5 世紀後葉から 6 世紀後半に至る集落である。Ⅰ～Ⅲ期には,SG 3500 の前身である河川 SD 3400 の周辺に,溝や塀で区画された建物群がある。特にⅢ期(6世紀前半)に SD 3400 の東岸にある建物群は,床束をもつ倉庫風の建物 3 棟と大型



左京八条一坊六坪遺構模式図

建物1棟が柱筋を揃えてL字形に並び、周囲を溝と塀で囲んでいる。Ⅳ期にはそれまで顕著であった建物のまとまりと配置の規則性が崩れ、この集落は衰退に向かう。このほか、調査区中央の河川SD 3340は遺存地割などから室町時代の佐保川の旧流路であることが判明した。

今回の調査で、三坪では給水施設らしい池状遺構を検出し、近傍に園池の存在が推測された。三坪は朱雀大路に面し、何らかの公的施設に関連する可能性がある。六坪では主屋級の建物を検出し、この坪が宅地としてあまり細分されない利用状況を明らかにすることができた。

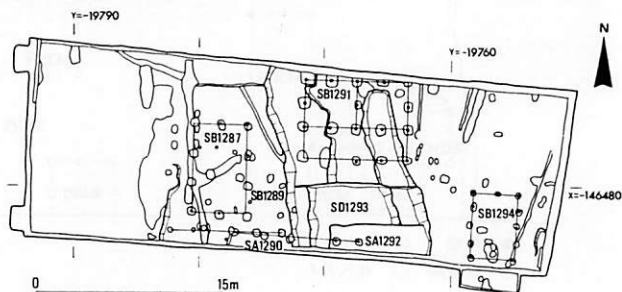
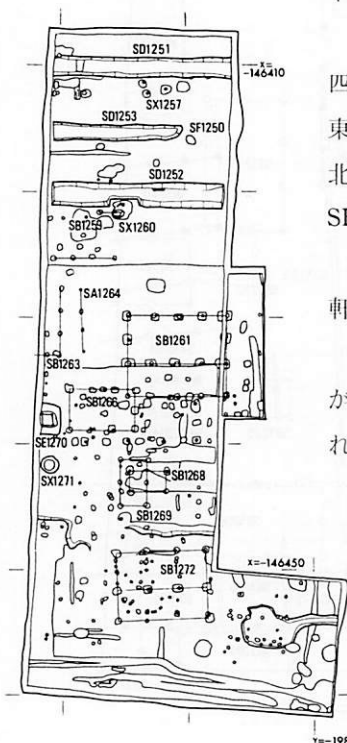
右京三条三坊四・五・六坪(第162次)の調査 マンション建設に伴う事前調査。四・五・六坪は各々坪境小路をはさんでL字形に並んでおり、四坪の東は西二坊大路に、四・五坪の南は三条大路に、五・六坪の西は西三坊坊間路に面している。調査は西・中央・東の3調査区を設けて実施したが、そのうち東区では遺物を含まない幅約22mの南北溝を検出したにとどまる。他の2調査区では奈良時代から鎌倉時代の遺構を検出した。主な遺構は掘立柱建物10棟、塀10条、井戸3基、溝、土壌などである。

西区北部では五・六坪の坪境小路SF 1250とその両側溝SD 1251・1252を検出した。溝心距離は約10mあり、小路としては広い。建物・塀はすべて五坪内で検出した。南廂付き東西棟SB 1261の規模がやや大きい以外は、小規模な建物ばかりである。坪北辺には小路にひらく門SB 1259がある。このほか、四隅に支柱を立て枳板を落とし込んで組み上げる井戸SE 1270や須恵器の大甕を円形の掘形内に据えたSX 1271がある。

中央区は四坪にあたり、西辺で検出された南北溝SD 1275は、四・五坪の坪境小路東側溝の可能性ある。建物では、南廂付き東西棟SB 1291の規模が最も大きい。SB 1291と柱筋を揃える南北棟SB 1287はその脇屋で、南に東西塀SA 1290を伴う。南北棟SB 1294は平安時代にくだる建物である。

遺物はSD 1252とSE 1270のほか西区の整地層から出土した。軒丸瓦、帯金具、曲物を利用した柄杓のほか大半は土器である。

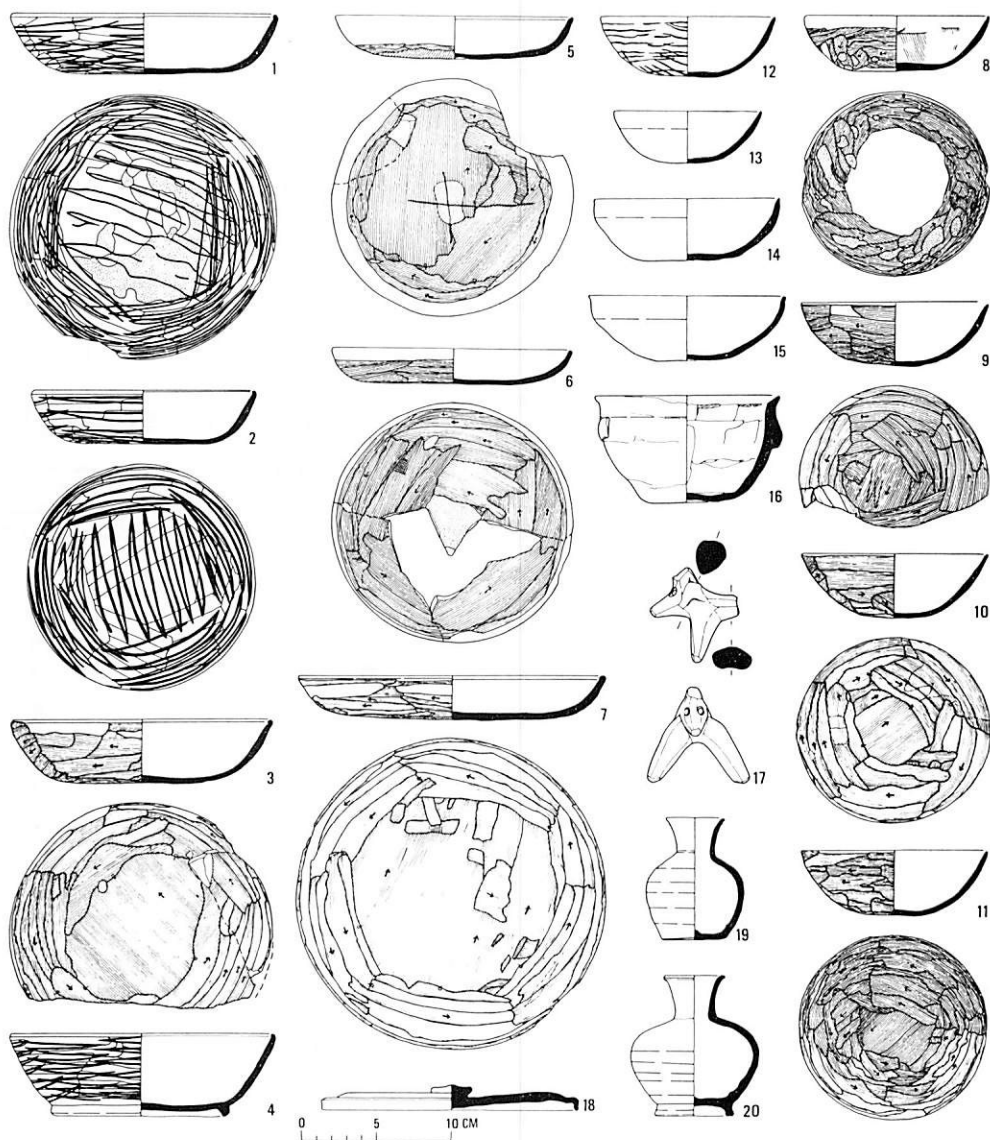
今回、西区で検出した建物はいずれも規模が小さく、また西区が五坪でも東部の坪境小路沿いの地区に相当することから、これらの建物は雑舎的性格をもつものであろう。(花谷 浩)



右京三条三坊四・五・六坪発掘調査遺構図(左・西区, 右・中央区)

井戸 SE 1270(西区)出土土器 なお、SE 1270 出土の土器は、保存状態が良好であるため、以下に実測図を掲げた。土師器には杯 A・杯 B・杯 C・皿 A・椀 A・椀 C・壺 B・甕があり、すべて平城宮土師器のⅡ群土器である。a₃ 手法は椀 A(12), b₀ 手法は杯 C(5), c₀ 手法は杯 AⅠ(3)・皿 AⅠ(7)・皿 AⅡ(6)・椀 A(8~11), c₁ 手法は杯 BⅡ(4), c₃ 手法は杯 AⅠ(1)・杯 AⅡ(2)に認められる。須恵器には杯 B 蓋(18)・壺 A 蓋・壺 L(20)・壺 M(19)・甕がある。長岡宮土器と異なるのは、杯 A(1・2) が c₃ 手法で調整され、ヘラ磨きが残ることであり、平城宮土器編年Ⅴ期 SK 2113 土器と異なるのは、椀 A(8~11)にヘラ磨きがなくなり、杯 A(3)が c₀ 手法によることである。平城宮土器編年Ⅴ期末の特徴を示す。

(山崎信二)



右京三条三坊五坪内井戸 SE 1270 出土土器実測図

3 平城京内寺院の調査

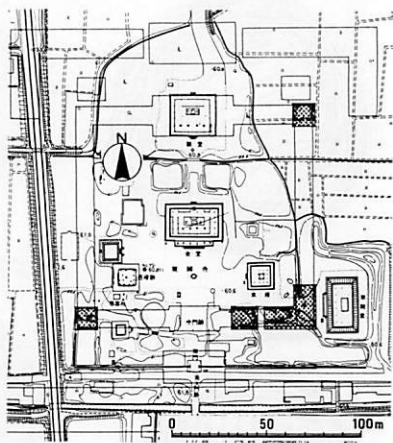
本年度は、薬師寺、興福寺、元興寺の各寺域内で建物建設に伴う事前調査を実施した。

このうち奈良時代の遺構を検出した薬師寺での発掘調査について、その成果を述べる。

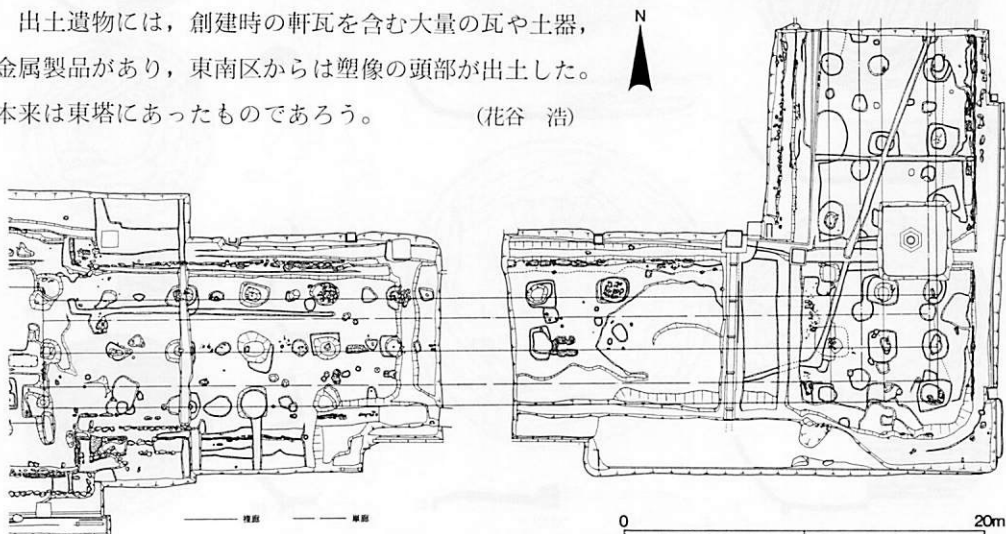
薬師寺回廊の調査 金堂・西塔・中門の再建に引き続く南面回廊の再建に先立って、南面回廊東半部（以下東南区）、回廊東北隅と西南隅の計3カ所で発掘調査を実施した。東南区では、1949・1982年の中門の発掘成果から想定した通り、複廊回廊の基壇と礎石の据え付け穴・抜き取り穴、足場穴を検出した。これに加え今回、複廊に先行する礎石据え付け穴と抜き取り穴を検出し、これが単廊の柱位置を示すことが判明した。単廊の基壇は版築により造成されるが、両側は緩く傾斜し外装を施した形跡がない。また、単廊の礎石抜き取り穴埋土と複廊基壇の拡幅部積み土とが同じ土と認められたので、単廊は未完成のまま礎石が撤去され、同時に基壇拡幅と複廊の建設が進められたとみられる。

以上の東南区での所見は他の2調査区でも確認されたので、創建回廊は当初四面とも単廊に計画され、基壇を造成し礎石を据える工程まで建設は進行したが、その段階で複廊に計画が変わり、基壇の拡幅と礎石の据え直しを行い複廊が完成した、と考えられる。単廊の柱間は、金堂等の調査結果から1尺=0.297mとすると桁行12.5尺、梁行12.5尺に復原される。中門取り付け部の2間は15.5尺を等分するか、1間が3尺と短いのかかもしれない。複廊の柱間は1尺=0.299mで桁行13.5尺、中門に取り付く2間のみ12尺とするのが妥当である。

出土遺物には、創建時の軒瓦を含む大量の瓦や土器、金属製品があり、東南区からは塑像の頭部が出土した。本来は東塔にあったものであろう。（花谷 浩）



薬師寺回廊発掘調査位置図



薬師寺回廊発掘調査遺構図（東南区）

1984年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	調査面積 (m ²)	備考
6AAI	平城宮 第155次	84. 3. 29～ 7. 5	3,100	宮南面大垣東端地区
6AGA	平城京 第156—1次	84. 4. 2～ 4. 9	187	右京一条二坊五坪
6AHP	平城京 第156—2次	84. 4. 2～ 4. 7	270	左京九条一坊三・六坪
6ABN	平城宮 第156—3次	84. 4. 4～ 4. 9	54	宮北面大垣
6AFH	平城京 第156—4次	84. 4. 23～ 5. 1	139	左京三条三坊三坪
6ADA	平城宮 第156—5次	84. 4. 24	24	馬寮地区北方
6AFM	平城京 第156—6次	84. 5. 4～ 5. 24	760	左京四条二坊一坪
6AGU	平城宮 第156—7次	84. 5. 15～ 5. 16	16	宮北方遺跡
6AFM	平城京 第156—8次	84. 5. 22～ 6. 29	750	左京四条二坊十五坪
6BKF	平城京 第156—9次	84. 5. 25～ 5. 26	10	興福寺境内
6AGD	平城京 第156—10次	84. 6. 11～ 7. 5	1,340	右京二条三坊十二坪
6AGT	平城京 第156—11次	84. 6. 22	15	右京北辺四坊
6AFV	平城宮 第156—12次	84. 7. 5～ 7. 6	5.3	宮北方遺跡
6ADA	平城宮 第156—13次	84. 7. 6～ 7. 7	6	宮北面大垣
6AHQ	平城京 第156—14次	84. 7. 4～ 7. 6	90	左京九条大路
6AGP	平城京 第156—15次	84. 7. 20～ 7. 23	35	右京五条三坊十二坪
6AGV	平城宮 第156—16次	84. 7. 27～ 7. 28	9	宮北方遺跡
6AFG	平城京 第156—17次	84. 8. 1～ 8. 13	176	左京三条四坊四坪
6AFE	平城京 第156—18次	84. 8. 17～ 9. 22	400	左京二条三坊三坪
6ABN	平城宮 第156—19次	84. 9. 28～ 10. 1	23	推定大膳職地区
6ADB	平城宮 第156—20次	84. 10. 8～ 10. 11	21	馬寮地区北方
6AGD	平城京 第156—21次	84. 10. 11～ 10. 18	70	右京二条三坊八坪
6AFD	平城京 第156—22次	84. 11. 8～ 11. 20	180	左京二条三坊六坪
6AHQ	平城京 第156—23次	84. 11. 7～ 11. 28	886	左京九条大路
6ADH	平城宮 第156—24次	84. 11. 2	4	宮西面大垣
6BGG	平城京 第156—25次	84. 11. 16～ 11. 19	17	元興寺境内
6AGA	平城京 第156—26次	84. 12. 13～ 12. 15	39	右京一条二坊一坪
6AFQ	平城京 第156—27次	84. 12. 13～ 12. 27	480	左京五条二坊一坪
6BGG	平城京 第156—28次	85. 1. 7～ 1. 10	31.5	元興寺境内
6ADB	平城宮 第156—29次	85. 1. 9～ 1. 11	18	馬寮地区北方
6AFV	平城宮 第156—30次	85. 1. 10～ 1. 11	10	宮北方遺跡
6ACA	平城宮 第156—31次	85. 1. 28～ 2. 2	77	御前池南岸
6A I I	平城京 第156—32次	85. 2. 20～ 3. 2	324	右京八条一坊十四坪
6AEK	平城京 第156—33次	85. 3. 4～ 3. 27	350	左京(外京)五条五坊九坪
6ABL・BY	平城宮 第157次	84. 7. 9～ 11. 1	2,750	推定第一次朝堂院地区東南隅
6AEB	平城京 第158次	84. 7. 4～ 8. 16	610	左京(外京)二条六坊十二坪
6AAD	平城宮 第159次	84. 7. 13～ 7. 25	90	内裏東方宮衙地区
6AHL	平城京 第160次	84. 8. 7～ 10. 26	3,300	左京八条一坊三・六坪
6AAR・AS	平城宮 第161次	84. 10. 1～ 12. 26	2,700	第二次朝堂院東第一堂
6AGH	平城京 第162次	84. 11. 21～ 12. 25	1,820	右京三条三坊四・五・六坪
6AAS	平城宮 第163次	85. 1. 8～ 4. 2	4,100	第二次朝堂院朝庭北東部分
6BYS	薬師寺 次数外	85. 1. 16～ 4. 27	1,000	薬師寺回廊